# マルサスとアイアランド問題

上野　格

## 一、はじめに

わが国でのマルサス研究は、その人口論および経済理論の双方について、既にかなり長い歴史をもっており、その研究活動の全範囲にわたって検討されてきているかの如くであるが、実は、当時の最大の問題の一つであり、特に「人口の原理」の著者が見逃す筈のなかった問題、即ちアイアランド問題について、彼がどのような態度をとり、どのような政策を提唱していたかについては、これ迄殆んど論じられることがなかった。

もっとも、これはわが国での現象であって、マルサスとアイアランドの関係について、イギリスでは既に前世紀末以来指摘されていたのである。例えば、ボナーのマルサス研究[1]には、マルサスにアイアランド問題を扱った匿名論文があること、一八一七年には休暇を利用して彼がウエストミースやキラニーの湖を訪れていること、一八二七年には移民委員会でアイアランドの情況について証言していることなどが紹介されており、証言の内容も詳しく示されている。また、オブライエンは、その名著『アイアランド経済史――合同から大飢饉まで――』一

九二一、の中で、次のように述べて、マルサスのアイアランドへの影響を示している。

「アイアランドは人口過剰であるという愚痴が十九世紀前半に繰返し聞かれた。〃アイアランドに関して〃とサドレーは言う〃意見は全く一致している。豊かになるためには、アイアランドは人口を減らさねばならぬ、と。〃これはマルサスの時代であり、すべての経済的害悪は過剰な人口から生ずると経済学者たちが考えていたことを思いおこす必要がある。マルサスの教義はアイアランドに特に適合すると考えられた、というのは、人口とその維持のために利用できる資源の間の不均衡がここほどひどいところは他にないと思われたからである。十九世紀初期のアイアランドの運命は二人の偉大な経済学者アダム・スミスとマルサスの思想によって大きく形作られた。中でも後者が多分より大きな影響を及ぼしていたであろう。[2]」

マルサスがアイアランドの人口問題を最初に論じたのは、一八〇三年の人口論第二版においてであった。そこで彼は、最近まで定説になっていた見解、即ち、一八世紀のアイアランドの急激な人口増加は、馬鈴薯と盛んな結婚によるものである、とする説を提示している。[3] これは必ずしも彼の独創ではないようであるが、十九世紀以降、彼の説として定着してきたと言えよう。

次に彼がアイアランドを論じたのが、この小論および続稿で取上げる二つの匿名論文（一八〇八年と一八〇九年）[4]である。人口論第二版では、単に人口の観点から論及されていたにすぎないのであるが、この両論文では、広く、イギリスのアイアランドに対する政策とその影響を論じ、緊急の課題としてカトリックの解放を非常に強く主張しているのである。英国国教会の牧師の主張としてはまことに異例と言わねばならぬ。

イギリス古典経済学のアイアランド問題に対する取組み方については、わが国ではまだ本格的な検討はされて

きていないが、アイアランドでは既に古典的とも言える研究が出されている。クィーンズ・ユニバシティ（ベルファスト）の、C・ブラック教授の力作『経済思想とアイアランド問題、一八一七―一八七〇』一九六〇、[5]がそれである。この書物では、当然マルサスも注目すべき論客の一人として大きく取上げられているが、しかし、この小論で扱う匿名論文については触れていない。従って、マルサスが何故にアイアランドに関心を強く寄せていたかも、明確には示されていないのである。

この小論では、右のブラック教授の業績の穴埋めとでも言うような作業を意図している。即ち、人口論第二版および一八〇八、一八〇九両論文に見られるアイアランド論と、カトリック解放を主とするその政策的提案の目的をさぐり、また、馬鈴薯、早婚、人口増などについての彼の説と経済史的事実との異同を若干検討するのが、差当ってのこの小論の目的である。

(1) Bonar, J., Malthus and His Work, (1885), Frank Cass, London, 1966, c.f., pp.194―206.

(2) O'Brien, G., The Economic History of Ireland from The Union to The Famine, (1921), Kelley, Clifton, 1972, p.71.

(3) マルサス、吉田秀夫訳『各版対照マルサス人口論』春秋社、昭和二四年、第二分冊二二二―三頁ほか。

(4) "Newenham and Others on The State of Ireland," July 1808, *Edinburgh Review*, Vol. XII, No. XXIV. "Newenham on The State of Ireland," April 1809, *Edinburgh Review*, Vol. XIV, No. XXVII.

筆者の利用したのは次のリプリントである。

Semmel, B. ed., Occasional Papers of T.R. Malthus on Ireland, Population, and Political Economy from Contemporary Journals, written anonymously and hitherto uncollected, Burt Franklin, N.Y., 1963.

以下、前者を一八〇八年論文、後者を一八〇九年論文と略記する。

(5) Black, R. D. C., Economic Thought and The Irish Question 1817—1870, Cambridge, 1960.

## 二、馬鈴薯、結婚、人口増および貧困

マルサスの人口法則は、最も単純化して表現すれば、生活の安定→人口増加→貧困、という因果関係になる。リカードは人口増加の方向以外に生活水準上昇の方向もあることを見てはいたが、彼の場合でも、民衆が貧困である限り、その要求水準は低く、人口増加が唯一の方向とされているのである。従ってマルサスにとっては、生活の安定を民衆にもたらすものは、すべて貧困の原因になる。アイアランドの場合、それは馬鈴薯であり、イングランドにおいては救貧法がその最たるものとされる。後に見る如く、アイアランド救済策として救貧法施行が提案されるなどということは、マルサスの口をきわめて非難してやまぬところなのである。

人口論第二版における次の論述は、本節の標題にかかげた四項目についてのマルサスの見解を非常にはっきりと示している。

「愛蘭の人口の詳細については殆んど知られていない。従って私は唯、馬鈴薯の使用の拡大によって、前世紀中にその人口が極めて急速に増加したと言うに止めることとする。しかしこの栄養ある食物が低廉であり、又この種の耕作をする時には平年には僅かな土地で一家を支える食物を得られるという事情は、人民の無智と低劣な境遇——そのために彼らは目先の単なる生存が出来るという見込だけで結婚してしまうのであるが——と相俟って、この国の産業と現在の資源が許す以上に人口を増加せしめるほどに結婚を奨励する結果となっている。そし

てその結果は当然に、下層階級の者は最も貧窮した悲惨な状態にあるということになるのである。人口に対する妨げは言うまでもなく主として積極的なものであり、そして極貧、湿潤な陋屋、粗悪不十分な衣服、及び時折の欠乏から起る疾病によって生ずる。かかる積極的妨げに加うるに、近年は、また内争、内乱、及び戒厳令という罪悪及び窮乏があるのである。[1]」

ここでは、馬鈴薯→結婚奨励→人口増→貧困という関係が、実証ぬきの「事実」として示されているにすぎない。強いて因果的な関連を求めれば、貧困（無智もその結果であるから）が貧困を生む、という悪循環が、アイアランドの貧困の説明として示されているだけである。従って、この叙述は、かえっていくつもの疑問を読む者にいだかせる。

第一の疑問は、アイアランドで馬鈴薯が主な食料になったのは何故であるか、その時期はいつ頃であるか、ということである。もし貧しさが馬鈴薯を主食にしたのであれば、これは貧困の原因ではなく、結果と見做さねばならない。また、それの普及した時期がそれ程遠い時期ではないならば、一八世紀中の人口急増は馬鈴薯以外に原因を求めねばならなくなる。

第二の疑問は、馬鈴薯による最低生活の安定は、本当に結婚を奨励するものであったか否か、ということである。既にA・ヤングも、アイアランドの結婚率の高さを彼自身の見聞として記してはいる。[2] マルサスは、しかし、アイアランドについてこれを実証してはいない。むしろ、人口論第六版には、これの実証が不可能である旨次の如く追記している。

「愛蘭の特有の事情から見て、平均死亡率、及び出生、結婚の人口に対する比率を知るのは極めて興味ある こ

とであろう。しかし不幸にして、何らの正確な教区記録簿もつけてなく、従ってこれらのことは如何に望ましくも手に入れることが出来ないのである。[3]」

馬鈴薯↓結婚奨励は「事実」として確認されたものではなかった。それどころか、右のような事情では、結婚が多かったか否かさえも、マルサスには実ははっきりしていなかった筈なのである。

第三の疑問は、マルサスのいわゆる「人口増加の妨げ」についてである。アイアランドでは極貧などの「責極的妨げ」と、内乱等（直接はユナイテッド・アイリッシュメンの蜂起をさす）がそれであるとされているが、彼は、それらによって人口が減少したとも、また、増加率が鈍ったとも言わない。第六版では、逆に、一六九五年から一八二一年まで（つまり第二版の十八年後まで）に、約四十五年に倍加する速度（ヨーロッパの他のどの国よりも急速）で増加したと追記している。[4] アイアランドでは「最も貧窮した悲惨な状態」でも人口増加は妨げられなかったことになる。これはどう理解すべきであろうか。更にまた、アイアランドの救済はどのような方策によって可能なのだろうか。

こうした数々の疑問に十分答えるような叙述をマルサスは人口論にあまり残していない。センメルによれば「マルサスは、おどろいたことに、彼の人口論の各版において、全然アイアランドを論じていない[5]」のである（一八〇八年、一八〇九年の両論文でもあまり満足のゆく答は示していないのであるが）。ただ、馬鈴薯普及の時期や薯と貧困の必然的連関を示そうとする箇所、および〝アイアランドの貧農に馬鈴薯畑と牛を与えて生活を安定させよ〟というA・ヤングの提案に、救貧法反対と同じ論拠（＝結婚を促し人口を増加させる）から反対する箇所があるのみである。

まず、馬鈴薯普及の時期を、彼は、十八世紀のはじまりから前半頃までと見ているようである。「愛蘭の食物は最近一世紀間に極めて急速に増加し」と述べ、また、「馬鈴薯で支払を受ける愛蘭の労働者は、小麦で支払を受ける英蘭の労働者の所得で養いうる人数の二倍の人数を養うに足る生活資料を得た。そして過去一世紀間におけるこれら二国の人口の増加は、その各々における労働者に与えられる主食の相対量に比例していた[6]」と述べていることから、それは明らかである。

最近の経済史研究では、まさにこの〝時期〟に疑問が出されており、馬鈴薯が食事に大きな影響を与えるようになったのは、せいぜい十八世紀の最後の二〇年足らずの頃からで、しかもそれも極貧のコッター層と農業労働者層に限られた、とする見解が有力になってきている[7]。アイアランド人口論争の立役者L・M・カレン教授は、一八世紀中葉のアイアランドについて、次のように述べている。

「穀物は広く栽培されたばかりではなく、地方の人や都市の人の食事で何よりも大事なものであった。このことを強調する必要があるのは、地方のアイアランド人の食事は殆んど、いや、専ら馬鈴薯ばかりだったと思われることが多いからである。勿論馬鈴薯は広く栽培され、食事でも目立ってはいた。しかし食事を支配してはいなかった。[8]」

（これは、マルサスを単に部分的に否定するだけではなく、従来定説になっていた十八世紀アイアランド社会像――非常にマルサス的な――の全面的否定をも意味する程の大論争の成果であるが、詳細は別の機会に譲る。）

馬鈴薯と貧困の必然的連関は、マルサスによれば、「食物の相対的価格の低廉が貧民の境遇に及ぼす悪い結果」の代表的な例とされる。先に見た如く、アイアランドの労働者は馬鈴薯即ち主食に関してはイングランドの労働

者の倍も豊かである。この限りで言えば実質賃金が二倍ということになる。しかし、「馬鈴薯を栽培すれば食料が多量に出来、従ってそれによって生活する労働の価格は低廉であるために、土地の地代は下落するよりも寧ろ騰貴する傾向を生じ、そして地代が騰貴する限り、馬鈴薯以外の工業品の原料その他凡ゆる種類の粗生生産物の価格は騰貴する傾向を生ずる。[9]」

この主張の背後に、スミスの有名な馬鈴薯栽培による地代上昇の説[10]を読みとることは、それほど困難ではあるまい。事実、一八〇八年論文ではマルサスはスミスのこの説を直接指摘し支持しており[11]、『経済学原理』一八二〇では、これに対するリカードの批判[12]を反批判し、更にスミス説の証明に、アイアランドの馬鈴薯→人口増→低賃金→地代上昇を例にあげているのである[13]（リカードのスミス批判は、馬鈴薯が同一労働で小麦の三倍の人口を養えるとすれば小麦から馬鈴薯への転換で差当り必要とされる耕地面積は以前の三分の一に減少する――人口は同一だから――から、地代も低下する――劣等地が放棄されるため――というのであって、地代の増加がおこるのは、人口が増大し原生産物への需要が十分高まってからであるとする。マルサスは馬鈴薯と人口増加を不可分のものとして論を進めているために、リカードに、途中はともかく結論だけ早く認めよ、と迫ったのである）。

人口論第二版の段階では、マルサスは、まだ地代騰貴をアイアランド特有の農業制度――コッター制度――との関係で見るまでには到っていない。従って、アイアランドの労働者は、主食（生活資料）に関してはイングランドの労働者の二倍豊かであるけれども、主食が安いから賃金が安く、剰余が多く、それが地代に回るために地代は高くなる[14]、と説明するのである。つまりマルサスの見るところ、アイアランドの労働者は主食に関しては本当は貧しくないことになり、貧しくないから地代が高くとも子孫をふやす生活が可能だということになるのであ

る。

当時のアイアランドでは、農業の労働者（コッターおよび農業労働者）は、一作物期間毎の借地契約で一エーカー程度の土地に自家用の馬鈴薯を植え、その借地の地代を、日賃金に換算した労働で払っていた。オブライエンの示す例によれば、あるコッターは、一エーカーと1/4の土地（地代五ポンド）、家（二六シル）、羊一頭分の牧草（十シル）を農場主farmerから借り、一日六ペンス1/2の計算で二五一日も農場に出て働いた。それで返済した地代等の合計は僅かに六ポンド十六シルである。[15] 当時、アイアランドで農場主が地主に支払った地代は一エーカーあたり一ポンド程度であり、それでもイングランドに比べて非常に高かった[16]ということであるので、コッター達の負担した地代が異常に高かったことは容易に想像される。彼らは自家用の馬鈴薯畑の手入れをする余裕もなく農場主の畑の農作業に出ており、そのため自家用の収獲は少くなりがちであったという。

こうしたことは、マルサスの叙述には差当り示されていない事情であるが、少くとも、こうした現象――これ自体が別の原因即ち植民地政策の結果だという意味での――だけでも押えてみなければ、さきの引用の前半分即ち馬鈴薯を実質賃金としながらその状態を貧しいと見ることは、本当は論理的に首尾一貫したものとならないのである。

引用の後半部分は一層異様に響く。そこでは労働の低廉は地代を高める傾向をもち、原材料の価格を高める傾向をもつとされているのである（勿論、地代が高くなる限りにおいて）。低賃金は高地代を媒介にして農産物価格を高めてしまうのである。人口論第二版は、まだ、マルサス地代論の形成を見ぬ時期の産物であるが、既に、ここに、その土地生産力説的地代理解が色濃く示されていると言えよう。つまり、ここには、耕作に用いられる人び

との維持に必要とされるよりもっと大きな生活必需品を生みだす土地の力、が前提されており、また、食物の豊富がもたらす人口増加が需要を生み出す、というマルサス地代論の第二の視点もここには既に出されているといえよう。さもなければ、農産物の高価格の説明がつかない。土地の稀少という第三の論点はここにはまだ表に出てきていないが、何故に、剰余が地主の手元に地代として集められねばならないか、が問われれば、ここでも十分問題の指摘はなされたことであろう。既に、貧しい農民が数を増し、土地を求める競争が激しくなることは、さきの引用までの限りでも当然推測がつくのであるから。しかし、この問題が明示されるのは、一八〇八年論文においてである。他方、農業技術の進歩による生産力増加の可能性は全然何の示唆もない。この問題は、作物の交替——小麦から馬鈴薯へ——による単位面積あたりの収獲の実質的増加という見方に形をかえることによって始めてマルサスには現実的なものとして理解されたようである。これも、しかし、一八〇八年論文に見られるものである。

ところで、先に見たように、地代が農産物価格の構成要素になり、原材料価格を引上げているところへ、「怠惰と熟練不足」という貧しさからくる通常の悪徳が加わって、一切の加工品が高価格になり、余った馬鈴薯では安すぎるため、換金しても衣服、住居その他の便宜品を買う余裕が全然なく、「その結果として、これらの点に関する彼れの境遇は、その生活資料が比較的に豊富であるにも拘らず、極度に惨めなものとなる」[17]とマルサスは述べている。

結局、マルサスは、ここでも馬鈴薯を貧困の直接の原因と論証することは出来なかったのである。低賃金であるとはいえ、彼によれば、その実質は十二分な食料を保証するものであったから、怠惰と熟練不足をもたらすほ

どの貧しさの原因にはなりえぬ筈である。従って、もし怠惰と熟練不足が事実であるとすれば、それをもたらした貧困は馬鈴薯以外の原因によるものなでければならない。マルサスは、ここでも貧困の悪循環だけを、それと気づかずに指摘しているにすぎないのである。

最後に、A・ヤングの提案に対する反論を考えてみたい。マルサスの反対理由は、それが「結婚と子供を現在規則正しく奨励している」救貧法と同じ効果をもつものだ、というにつきる。周知の如く、他の経済学者達も、マルサスのこの見解に同調し、救貧税の増徴がもたらす負担の増大と「資本蓄積の阻碍」に反対して、イングランドに実施されている救貧法に反対し、アイアランドに救貧法を実施せよという要求に反対したのであった。換言すれば、人口法則の作用する限り、救貧は貧しさの解消を意味せず、むしろ貧困の再生産を意味するとされたのである。

しかし、こうした救貧法、即ち生活保護は、本当に、当時、結婚を奨励し出生率を高めたのであろうか。既に何人もの研究が明らかにしているように、マルサスのこうした批判は何ら現実の根拠をもたぬものであった。例えば、十九世紀のはじめのイングランドにおける救貧法と結婚率および人口増加を検討したJ・P・ハゼルは、次の如く述べている。

「(1)マルサスおよび十九世紀初頭の政府委員たちの主張、即ち、救貧法とくに手当支給制度は予防的阻止条件を堀り崩すため、人口増加の第一の原因となっている、という主張は根本的に間違っている(fundamentally erroneous)、(2)手当支給制度は出生率または結婚率を増加させることはなかったが、あるいは幼児死亡率を引下げたかもしれない、但し、全般的な死亡率に影響を与えたり、人口増加率を目立って増加させたりするほどの大きさ

ではないが。[18]」

こうした彼の結論は、イングランドの一つの典型と見做せる教区の一八〇一年から三五年までの出生率、死亡率、結婚率、幼児死亡の傾向を調べた上でのものである。彼の調査によれば、手当支給制度発足後に、結婚率は低下し、出生率も低下し、結局、人口増加を意味する傾向としては、幼児死亡率の低下が若干見られたに留まっていたのである。

ハゼルは、従って、次のような推測をする。

「スピーナムランド（制度）が本来低賃金に対する反応であってその原因ではない、というブラウグの主張と同じように、手当支給制度は人口増加に対する反応であってそれを刺激するものではなかったと見ることが出来るのではなかろうか。」――（　）内は筆者――

馬鈴薯を貧困の原因とするマルサスと、それを貧困の結果とする現在の経済史研究の成果との関係が、救貧法と人口増加についても全く同じように見られるのである。[19]

かくして、ハゼルは次のように主張する。

「マルサス的な救貧法＝人口理論は、子だくさんの貧乏人に非難をむけさせることで、貧困の問題を片付けてしまおうとする同時代人たちには全く都合がよかったけれども、一九世紀初期の人口の傾向を解明するものとは、とうてい言えないのである。[20]」

マルサスは、しかし、これらの研究がイングランドについてのものであって、アイアランドについて同じことが言えるかどうか疑わしい、と逃げることが出来るかの如くである。しかし、それについても、既に、最近のア

イアランド経済史研究は、否定的な答を用意しているのである。

「一七三五年と一七八五年の間に、人口は三百万から四百万に、つまり三三%増加した。一八四一年までには、それは八二〇万に、つまり、更に一〇五%増加した。

早婚がこの増加の原因と屢々見られてきている。馬鈴薯栽培とその食事の普及が（家族の）細分化を促し、この細分化の容易になったことが、一七八〇年迄に非常な早婚への動きを促進したと主張されてきている。しかしながら、結婚が早くなったという全般的傾向を示す証拠は何もなく、逆に、農業社会で結婚が注意深く行なわれ細分化が制限されたことを示す明確な証拠があるのである。[22]」――（　）内は筆者――

このカレンの主張は、さきの馬鈴薯普及の時期についての定説批判とともに、アイアランド人口論争の最近の成果であるが、これの証明の手続き等については、やはり別の機会にゆずらざるをえない。ここでは、おそらく誰もが反射的に抱くと思われる疑問、即ち、カレン自身が示している急激な人口増加は、それでは、貧しいアイアランドにおいて、何を本当の契機としてひきおこされたのであるか、という問に対して、カレンは、当時のヨーロッパ各国に見られたと同じく、多分、一回限りの何かの原因による死亡率の低下が原因であろう、と述べていることだけを付記しておく（筆者は、しかし、十八世紀にコッター層などアイアランドの下層農民層に馬鈴薯が早く普及したことから、それが死亡率特に幼児死亡率を減少させるのに一役かった――特にその栄養価から考えても――のではないか、という憶測を今もって捨てきれずにいる。カトリックとプロテスタントの間に生活上の倫理に何らかの差異があるとすれば、それもまた一考に価する条件かもしれない。しかし、こうした問題は憶測で片付けるわけにはゆかぬのであって、筆者には少々荷が重すぎる感じもしないではない。）

以上で、人口論第二版でマルサスの描いたアイアランドが、馬鈴薯→結婚→人口増→貧困という図式であり、それが、証明または理論的考察ぬきで、「事実」として提示されていたにすぎず、実証的研究によって、現在は殆んど完全に批判されたこと、しかしながら、これまで長く定説として定着してきていたものであったこと、などがほぼ明らかに出来たかと思う。次に、稿を改めて、一八〇八年、一八〇九年論文に見られるマサルスのアイアランド論を、特に、そこに提案され検討されている諸政策を中心に考えてみたい。

(1) Malthus, T. R., An Essay on Population, Everyman's Library, Vol. I, pp. 277—278.
吉田秀夫訳『各版対照、マルサス人口論』古典経済学叢書　春秋社　昭和二四年　第二分冊　二二二頁。
引用中にある馬鈴薯の栄養価の高さ、および、人口扶養力の大きさについては、当時かなり広く認められていたらしい。例えば、アダム・スミスは、馬鈴薯が小麦に比べて耕作上非常に有利であると、次の如く述べている。
「馬鈴薯畑の産する食物はその量では米田の産するところに劣らず、小麦畑の産するところに遥かに勝っている。一エーカーの土地から馬鈴薯が一万二千封度とれても、それは普通のことであって、同地積の土地から小麦が二千封度とれたのに比べ収量が多いとはいえない。なるほど、この二種の植物から摂取する食物、即ち実質上の滋養分、は馬鈴薯の水を含む性質上、その重量に比例するものではない。しかし大いに斟酌して、馬鈴薯の重量の半分は水分だとしても、馬鈴薯畑一エーカーはなおかつ実質上の滋養分凡そ六千封度、即ち小麦畑一エーカーの収量の三倍を産出するであろう。馬鈴薯畑一エーカーは、小麦畑一エーカーよりも少い費用で耕作できる。蓋し、総じて小麦の播種前土地を休作地としておく入費は、馬鈴薯の耕作上常に必要とする除草その他普通以上の耕作の費用よりも多いからである。」Smith, A., The Wealth of Nations, Edited by Edwin Cannan, London, 1961, Vol. I, pp. 178—179.
竹内謙二訳『国富論』慶友社　昭和三四年、(1)、二一九—二二〇頁。

馬鈴薯を小麦に換算してその栄養価や労働および要求される土地面積の小麦との比較を行なうのは他にも例が多い。但し、換算の基準などはかなり違い、スミスが右の如く馬鈴薯の重量の二分の一を実質と見たのは例外で、普通はむしろ三分の一または四分の一と見ていたようであり、それでも小麦より数段まさっていると考えられていた。Malthus, 一八〇八年論文、四〇—四一頁脚注参照。

また、馬鈴薯とアイアランドの関係についても、スミスは、次の如き、若干奇妙な説明を行なっている。

「恐らく、イギリス諸領土内における、最も強壮な男性、即ちロンドンの〔ゼダン型〕駕籠かき人夫、運搬人足、石炭仲仕と、最も美しい女性、即ち娼を売って生活する不幸な婦人とは、その大部分は、総じて馬鈴薯を食べているアイルランドの最下層民の中から出てくるものだ、と云われている。馬鈴薯は滋養になる。人間の健康に特別好適する、ということははっきり証明ずみで、他の如何なる食物でもこれ以上にはっきりした証明を与え得るものはない。」Smith, A., op. cit., pp. 179—180. 竹内訳、二二一頁。

何故スミスがこのようなことを述べたのか、その真意は、どうもよく把めないが、食料として馬鈴薯がすぐれていることが、当時かなり認められていたことだけは確認できる。

なお、マルサスからの引用の最後にある内乱や戒厳令というのは、フランス革命軍の援助をも得てアイアランドで大きく渦巻いた独立闘争—ユナイテッド・アイリッシュメンの闘争一七九五—九八を指している。これが契機になってイギリスに団結禁止法が制定された。マルサスにとても、この事件は記憶に生々しかったのである。Bonar, op. cit., p. 195.

(2) 「結婚は確かに、イングランドにおけるより、アイアランドにおける方がはるかに多く行なわれている。私は、未婚の農民やコッターを殆んど見なかった。しかも、召使いのような、われわれのところでは全然結婚などしない階級にすら（既婚者が）多く見られた。紳士方の家庭の従僕や女中たちの大部分が結婚している。このようなことはイン

グランドではまずめったにないことである。

もう一つの重要な点は彼らの子供達が全然重荷になっていないことである。貧民の状態を探ってみて、私は、彼らの幸福と安楽とが一般にその子供達の数に比例しており、子供を一人も持たぬことが何よりの不幸と考えられていることを知った。これが事実であり、一般的な考え方である限り、それは、必然的に、かなりの影響力をもって、早婚を促がし、その結果人口を増加させる。

民衆の食物が馬鈴薯であることも、これに劣らぬ重要な点である。何故なら、もし貧民の普段の食物が非常に高価で注意深く節約せねばならぬ場合は、子供たちは、自分たちを育てるのに必要なものを十分とれなくなるからである……。」Young, A., A Tour in Ireland 1776—1779, Edited by A. W. Hutton, Irish University Press, 1970, Vol. II., p. 120.

見らるる如く、マルサス説はヤングの見聞記と全く同じ筋道をたどっているのである。

(3) Malthus, op. cit., p. 278. 吉田訳、前掲書二二三頁。

(4) ibid, p. 278, 訳同右二二三頁。

(5) Semmel, B., op. cit., P. 17.

(6) Malthus, T. R., An Essay on Population, Everyman's Library, Vo. II., p. 73, 吉田訳『各版対照　マルサス人口論』第三分冊　一六九—一七〇頁。

(7) 「(馬鈴薯への)移行の時期はなお議論の余地のある問題である。最近、この問題の権威—彼の見解は尊敬を集めている—によって次のように主張された、即ち、馬鈴薯が食事に主要な影響を与えるようになるのは、十八世紀の最後の二〇年であり、その時でもそれは極貧のコッター層に殆んど限られていた、と。この層が社会で大きな部分を占めるようになるにつれて、馬鈴薯の食事が社会全体の最も特徴的なものとなったのである。〃十九世紀のはじまりか

ら、アイアランド史を逆上るにつれて、また、一八四五年から現代に向けて進んでくるにつれて、アイアランドの食事と農業の馬鈴薯との一体性は急速になくなってくる"(L. M. Cullen, 'Irish History without The Potato', in *Past and Present*, July, 1968. No. 40, pp. 72—83). アイアランド人口史の長老コーネル教授は、カレン博士のこの時期および階層の両者について懐疑的であることを付け加えておくのが妥当であろう。コーネル教授は、なお、馬鈴薯の主な食事への影響は、それが未だ他の食物にとって代らず、その補いをなしていた時期に見られる、という見解を持しておられる。」Lyons, F. S. L., Ireland Since The Famine, London, 1971, p. 23.

(8) Cullen, L. M., An Economic History of Ireland since 1660, London, 1972, p. 70.

(9) Malthus, op. cit., Vol. II, p. 73. 吉田訳、同書第三分冊　一七一頁。

(10) 「もしも馬鈴薯が米の若干の産米国におけるが如くに、欧洲の何れかの部分で、一旦その人民の普通の愛好する食物となり、そして小麦その他人間の食物に供せられる穀物が今日占めているのと同じ面積の耕地を占めるようになれば、耕地の面積は同じであっても、それは遥かに多数の人間を食べさせるようになり、そして労働者は一般に馬鈴薯で養われるようになるから、その耕作上投下される一切の資本を回収し、一切の労働を養った後に、一層大きな剰余が残ることになるであろう。そしてこの剰余の中から地主に帰する分前も、一層多くなるであろう。また現在に比し人口も増殖するであろうし、地代も遥かに上騰するであろう。

馬鈴薯作りに適する土地は、他の殆んど一切の有用植物の耕作にも適する。それ故、もし馬鈴薯が今日小麦が占めているのと同量の耕地を占めるようになれば、今日の小麦と同様にして、他の耕地大部分の地代を定めることになるであろう。」Smith, A., op, cit., p. 179. 竹内訳、同書第一分冊　二二〇頁。

(11) 一八〇八年論文　四四頁。

(12) The Works and Correspondence of David Ricardo, Edited by Piero Sraffa, Cambridge, 1953, Vol. I, pp.

333—337.

堀経夫訳『経済学および課税の原理』デイヴィド・リカードウ全集第一巻、雄松堂　一九七二年、三八一頁—三八七頁。

(13) The Works and Correspondence of David Ricardo, Edited by Piero Sraffa, Cambridge, 1957, Vol. II, pp. 215—217.

鈴木鴻一郎訳『マルサス経済学原理評注』ディヴィド・リカードウ全集第二巻、雄松堂　一九七一年　二七三頁—二七五頁。

(14) Malthus, op. cit., Vol. II, p. 73. 吉田訳　同書第三分冊　一七〇頁。

(15) O'Brien, op. cit, pp. 19—20.

(16) O'Brien, ibid., p. 97.

(17) Malthus, op cit, Vol. II, p 73. 吉田訳　同書第三分冊　一七〇頁。

(18) Huzel, J P., Malthus, The Poor Law, and Population in Early Nineteenth-Century England, in *Economic History Review*, Vol. XXII, 1969, p. 451.

(19) Huzel, P. J., ibid, p. 451.

(20) 「けだしその隣人が足で歩くのに或者は馬車を置いて乗るが故に、一つは富み他は貧しいのではなくて、一つは富めるが故に馬車に乗り、他は貧しいが故に歩くのである。」Smith, A., op. cit., Vol. I, p. 85. 竹内訳　同書　一〇三頁。

スミスの指摘する原因と結果の取ちがえをマルサスは犯しているようである。

(21) Huzel, J. P., op. cit, p. 451.

(22) Cullen, L. M., op. cit., p 118.
結婚と人口増加についての最近の論争については、Lyons, F. S. L., op. cit., p. 27 の脚注に紹介がある。